

野内与吉の生涯と日本人ペルー移住： 「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」展開催

野内セサル良郎¹⁾・稲村哲也²⁾

The life of Yokichi Nouchi and the Japanese migration to Peru: The exhibition “The Founder of Machupicchu Village, Yokichi Nouchi, and the Ancient Civilization”

Cesar Yoshiro NOUCHI, Tetsuya INAMURA

要 旨

日本人研究者による古代アンデス文明の研究には目覚ましいものがある。しかし、その源流が、1935年の2人の日本人の「マチュピチュでの出会い」にあることは、あまり知られていない。それは、マチュピチュ遺跡のふもとにあるマチュピチュ村の創設者になった福島県出身の移民・野内与吉と、ラテンアメリカで実業家として大成功した秋田県出身の天野芳太郎の出会いである。天野は、横浜で事業を興して資金をつくって中南米に渡り、パナマを拠点に実業家として成功した。子ども時代から考古学に関心があった天野は、1935年、ペルーのマチュピチュ遺跡を訪問した。そのときすでに、遺跡の麓にあるマチュピチュ村には、野内与吉が住んでホテルを運営していた。野内に案内されてマチュピチュ遺跡を踏査した後、天野は古代アンデス文明に魅了され、考古学と遺物のコレクションに身を投じ、1964年にペルー・リマ市に考古学博物館を開設した。

1957年東京大学の准教授であった泉靖一がリマで会い、天野芳太郎の勧めにより、泉は東京大学の発掘調査団を設立した。それ以後、調査団はアンデス文明研究に関する輝かしい成果をあげてきた。

契約移民としてペルーに渡った野内与吉は、アシエンダ（大農園）での労働に従事した後、クスコ＝マチュピチュ間の鉄道建設に携わった。国有鉄道会社の仕事を辞めたあと、彼はそのままマチュピチュ村に住みつき、現地女性と一緒に家族をもった。野内は、ホテル業を始めるかたわら、上水道の整備や発電所の設置など、村人のために働き、マチュピチュ村の村長になった。

2016年8月、筆者ら野内セサル良郎（野内与吉の孫）と稲村は、野内与吉の生まれ故郷である大玉村に近い二本松市で展示会を企画・運営し、野内与吉の生涯と古代アンデス文明、日本人によるアンデス文明研究への貢献などを紹介した。本稿では、野内与吉の生涯と展示会について報告するとともに、ペルーへの日本人移住についても論じる。

ABSTRACT

Japanese researchers have successfully conducted many studies on ancient Andean civilization. However, few people know that the origin of these research studies is the “Encounter in Machupicchu” of two Japanese persons, namely Yokichi Nouchi, a Japanese migrant from Fukushima prefecture, and Yoshitaro Amano from Akita prefecture, who achieved great success with his business in Latin America. Amano succeeded in his business in Yokohama and went to Latin America, where he established his business, which was based in Panama. He was interested in archeology and visited the Machu Picchu ruins in Peru in 1935, by when Nouchi had already established his life and was running a hotel in the Machupicchu village at the foot of the Machu Picchu ruins. Amano researched the Machu Picchu ruins for a week with Nouchi’s guidance. From then, he was fascinated with the ancient Andean civilization and devoted himself to its study and collecting archeological artifacts. Finally, he opened an archaeology museum in Lima in 1964.

In 1957, Seiichi Izumi, an Assistant Professor at Tokyo University, encountered Amano in Lima. Based on Amano’s recommendation, Izumi organized a research group from Tokyo University to conduct excavation activities. Since

¹⁾ 日本マチュピチュ協会会長

²⁾ 放送大学教授（「人間と文化」コース）

then, the team has had excellent results in their research on Andean civilization.

Yokichi Nouchi, who went to Peru as an immigrant and worked at a Hacienda, then engaged in work related to the railway from Cuzco to Machu Picchu. After finishing his job at the railway company, he stayed and had his family join with a local woman in Machupicchu village. Managing a hotel, he exerted himself in the interests of the villagers, establishing infrastructure such as the waterworks and electric plant. Furthermore, he became the authority of the village.

Authors Cesar Yoshiro Nouchi, a grandchild of Yokichi Nouchi, and Tetsuya Inamura planned and managed in August 2016 the exhibition at Nihonmatsu city near Otama village, the home village of Yokichi Nouchi, Fukushima prefecture, with exhibits on the life of Yokichi Nouchi, the ancient Andean civilization, and the contribution of the Japanese to research on the Andean civilization. This article describes the life history of Yokichi Nouchi, the history of Japanese migration to Peru, and the exhibition itself.

1 はじめに

古代アンデス文明の研究には、多くの日本人が貢献してきたが、その源流について知る人は少ない。それは、1935年のマチュピチュでの2人の日本人—福島出身の移民・野内与吉と秋田出身の実業家・天野芳太郎—の出会いにあった。戦後になって、さらにいくつかの重要な出会いが、東京大学アンデス調査団や博物館開設につながってゆく。筆者は、放送大学特別番組「古代アンデス文明と日本人」(2015年放映)を制作し、それに関連して、天野芳太郎の生誕の地である秋田県で「アンデスに魅せられた男・天野芳太郎」展を企画し、放送大学秋田学習センター(井上浩所長)等の協力を得て、2015年6月28日～7月20日に開催した。特別番組とこの展覧会の内容については、「古代アンデス文明と日本人—放送大学特別講義と展示会」として、本誌33号に掲載された(稲村哲也ほか2016)。ここでは、天野芳太郎の生涯と古代アンデス文明の特徴について論じた。

秋田での展示会の成功を踏まえて、2016年8月、筆者(稲村)と共著者の野内セサル良郎(野内与吉の孫)は、野内与吉の故郷の福島県大玉村に近い二本松市で「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」展(放送大学・日本マチュピチュ協会・福島民報主催)を開催した(写真1:展示会チラシ)。本稿では主として、野内与吉の生涯、それに関連するテーマとしてペルーへの日本人移住の歴史、そして、開催した展示会の内容と経緯について述べる。本論に入る前に、展示会の基本的なコンセプトとなった、マチュピチュでの天野と野内の出会い、日本人による古代アンデス文明の研究について簡潔にまとめておきたい。

1-1 マチュピチュの出会い：野内与吉と天野芳太郎

野内与吉は1895年福島県大玉村に生まれた。1917年、契約移民としてペルーに渡り、アシエンダ(大農園)での労働に従事した。その後、クスコ=マチュピチュ間の鉄道建設に携わり、そのままマチュピチュ遺跡ふもとの集落に住みつき、家族をもった。野内は、ホテル業を始めるかたわら地域の環境整備に努め、住

民の大きな信頼を得てマチュピチュ村の村長になった。

1898年に秋田県で生まれた天野芳太郎は、横浜馬車道で興した「子育て饅頭」などの事業で資金を手にすると、横浜港から海外雄飛を果たし、パナマを拠点に中南米各地で漁業、農業、貿易などの事業を展開し、南米有数の実業家となった。幼少から考古学に関心をもっていた天野は、1935年ペルーに渡り、マチュピチュを訪問した。マチュピチュ遺跡の麓の村には野内与吉が在住し、ホテルの経営をはじめたばかりだった。天野は、野内与吉のホテルに泊まり、彼の案内でマチュピチュ遺跡を一週間にわたって踏査した。天野は、戦争が始まるとパナマで拘束され、北米の捕虜収容所に送られ第1回捕虜交換船で本国送還となった。

野内与吉が日本を発って以来、故郷の家族との音信が途絶えていた。野内は、マチュピチュ村で家族をもち、村長を務めたのち余生を送っていたが、その彼に大きな出来事が起こった。1958年、三笠宮殿下が、ブラジル移住50周年記念式典にご出席の帰路ペルーに寄り、マチュピチュ遺跡をご訪問されたのである。野内与吉が殿下を出迎え、その長女オルガが殿下に花束を贈呈した。すると、それが日本の新聞に報道され、記事を見た日本の家族は、与吉の消息を知り、旅費を送って半世紀ぶりの与吉の帰国が実現した。1979年、「日本に残れ」という実家の勧めを辞退し、ペルーに残した家族のために現地に戻ると、野内与吉はまもなく亡くなった。

1-2 マチュピチュの出会いから始まった古代アンデス文明研究³⁾

捕虜交換船で帰国した天野芳太郎は、戦後の1951年密航同然にペルーに戻り、事業(漁業)を再興したあと、アンデス文明の研究と遺物コレクションに身を投じ、1964年リマに天野博物館(考古学博物館)を創設した。マチュピチュでの出会いから20年後のことである。

天野博物館開設の少し前、泉靖一(当時東京大学助教授)がリマで天野芳太郎氏と出会った。天野の勧めにより、泉靖一団長のもと東京大学アンデス考古学調査団が組織され、1960年からペルー中部のワヌコ市のコトシュ遺跡の発掘調査が開始された。コトシュ遺跡

³⁾ 稲村哲也ほか2016を参照されたい。

では、当時アンデス最古として知られていたチャビン期の神殿の下から「交差した手の神殿」（無土器時代、当時最古の神殿）が現れるという大発見があり、その後の東大アンデス調査団の輝かしい伝統につながった（写真2）。1988年からは大貫良夫団長のもとで、クントゥル・ワシ遺跡の発掘が始められた（写真3）。この遺跡では、南北アメリカ最古の黄金装飾品が出土するなど大きな成果をあげ、それを契機に現地にクントゥル・ワシ博物館が設立された。

さらに、岡山県の実業家で魚網製造会社を営んでいた森下精一が、1969年にペルーで漁業会社を営んでいた天野芳太郎を尋ね、リマの天野博物館を訪問した。森下はアンデスの文明に魅せられ、それから中南米の考古遺物のコレクションを始め、1975年岡山にBIZEN中南米美術館を創設した。

こうして、野内与吉と天野芳太郎のマチュピチュの出会いにはじまる日本人のアンデスへの熱い想いが、古代アンデス文明の研究や博物館設立として大きく花開いたのである。福島での展示会では、野内与吉のマチュピチュ鉄道関連等の遺品を展示するとともに、古代アンデス文明に関しては、BIZEN中南米美術館（森下矢須之館長）所蔵の土器、織物、ミイラ頭骨など、東大アンデス調査団が発掘した南北アメリカ大陸最古の黄金装飾品（レプリカ）などの考古遺物を展示した。また、野外民族博物館リトルワールド（館長大貫良夫）が所蔵する現在のアンデスの伝統的な民具なども展示した。

2 野内与吉の生涯

2-1 ペルーへの移住

野内与吉は1895年11月18日、福島県安達郡大玉村（旧玉井村）で野内与惣松とイセの次男として生まれた。与吉は、玉井尋常小学校を1906年3月24日に卒業した。

教育を与えられる家庭環境にあり、与吉は当時としては裕福な農家で育った。野内家には、与吉の兄弟達がお宮参りに着た着物が大切に保存されている。着物には、子どもを病魔や厄災から守るため背守りが施されている。赤の絹糸八本を束にして、着物の背中に縫い付け、もう一方の糸の端を男の子のしるしとして左下に曲げ、縫い付けたものである。このような風習は、現在は地域にも野内家にも残っていないが、この着物から、与吉たちが大事に育てられたことや、両親の子どもたちへの愛情が伝わってくる。

1917年、21歳の時、ペルーへの契約移民募集を目にし、新たな世界への夢を抱いた。与吉が両親にペルー渡航の決断を告げると、両親は「なぜ日本から出る必要があるのか」と大反対したという。両親は、息子が海外へ行くことに反対し悲しかったが、与吉の意志は固く、両親は最後にはあきらめざるをえなかった。与吉は「海外で成功して日本へ戻ってきます」とペルー行きを決断した。

「在ペルー邦人75年の歩み（1899年～1974年）」（ペルー新報社）に、移民開始から75年までの歴史が記載され、移住者の名簿（出身都道府県・氏名）や移住に関するエピソードなどが掲載されている。その中で、1917年の第48航海者として与吉の氏名が記載されている。1917年1月23日に移民船「紀洋丸」で横浜港から出国し、1917年3月17日にペルーのカジャオ港へ到着し、サン・ニコラスというアシエンダ（大農園）が移民先である事が判明した。

2-2 農園からマチュピチュへ

野内与吉は、ペルーに到着すると、海岸地域にあるサン・ニコラスのアシエンダで、契約移民として働くこととなる。しかし、契約内容と実態との違いや、賃金の不払いなどの事情から、アシエンダでの仕事を半年で辞める。そして、アメリカ、ブラジルなどを放浪してから、ボリビアのサント・ドミンゴで仕事をし、その後、ペルーの熱帯低地のプエルト・マルドナド地区へ渡る。与吉はそこの教会でカトリックの洗礼を受け、「オスカル」という洗礼名を受け、以後、「オスカル・ノウチ」と呼ばれるようになった。

それから、与吉はペルー山岳地域にあるクスコ市（インカ帝国の旧都）へ向かい、ペルー国鉄のクスコ・サンタ・アナ鉄道に勤務し、列車の運転や鉄道工事に携わった。鉄道敷設の目的は、約160キロ離れた低地のキリヤバンバ付近で採れるカカオ、コーヒー豆などの農産物をクスコに積み出す輸送手段の確立であった。険しいアンデス山脈での過酷な状況の中で鉄道工事が進められ、1929年、クスコ市からマキナチャヨ集落（現在のマチュピチュ村）までの線路が完成した（写真4）。

与吉はこの集落でマリア・ポルティージョと暮らすことになる。2年後の1931年に長男が生まれ、ホセと名付けるも2歳で他界した。その後、1人の娘と3人の息子に恵まれた。

マキナチャヨ集落は山間の密林のなかに位置していた。そこで、与吉は、木を伐採し、道路を整備し、畑も作った。また、村人が川に水を汲みに行っているのを見て、山腹の湧き水から村へ水路を引いた。村人は、重労働から逃れ、きれいな水が飲めるようになったと喜んだ。さらに、村人と協力して小さな川に石や丸太を使ってダムを造り、ダムに貯めた水の力を利用してタービンを回して発電する水力発電設備を造り、村に電気をもたらした。当時のダムは解体されたが、現在も、当時使用されていた大きなタービンが村の広場に残されている。

1935年頃には、この村で初の本格的木造建築である「ホテル・ノウチ」を自ら建設した。建物の骨組みには線路のレールを利用し、床に当時は高価だった木材を用いた、3階建て21部屋の立派なホテルだった。村で初めてのこのホテルの1階を郵便局や交番として無償で提供し、後には2階も村長室や裁判所として使用された。こうして、「ホテル・ノウチ」が村の中心と

なって、マチュピチュ村は発展していった。

与吉は、スペイン語のほか先住民の言語であるケチュア語にも通じ、英語も喋ることができた。さらに、与吉は、手先が器用で、機械の修理など何でもこなし、優秀な技術者として尊敬され、村人のために必要な人物として、信頼を集めた(写真5)。

2-3 マチュピチュの出会い

当時、マチュピチュ遺跡はまだ観光化しておらず、学者や探検家などが調査に訪れていた。そして、1935年、実業家の天野芳太郎氏がマチュピチュを訪問した。

尾塩尚が記した天野芳太郎の伝記「天界航路」に、このマチュピチュでの出会いについての記述がある(尾塩尚1984:226-227)。天野へのインタビューに基づいた尾塩による描写である。

早朝クスコをたった軽便鉄道は山ひだをジグザグにぬいながら二時間半をかけてウルバンバ川沿いに進んだ。軌道のすぐそばまで水飛沫が飛んでくる。それは今日でも川というよりは荒れ狂う波濤である。水は茶色く濁っており、飛び込めばチョコレート色に染まってしまうような濁流だ。台車がガタガタだし、身体の重心を支え切れないようなカーブも多かった。(中略)やがて列車は現在のマチュピチュ駅の一つ手前の終点で止まった。

駅前に一軒の旅館があった。それはいかにも草深い田舎屋だったが、天野はここで旅装をとくことにした。旅の疲れが出てかれはベッドに横たわった。夜闇に目がなれて天井を仰ぐと、そのすき間から南半球の星空が見える。天野はそれを「月星群れ落ちる如き感があった」と述懐している。

夜半に到着した天野が宿で朝食をとっているときのこと、宿の主人を訪ねてきた村の住民が「ハポネス(日本人)！」と声をかけたことから、野内与吉と天野芳太郎の次のような会話が始まった(228-229)。

天野「君は日本人だったのか。」

野内「そういう君も日本人か。」

天野「おれはパナマの商人だ。」

野内「え、パナマからですか。しかし、商人が一体なぜここに来なければならないのです。」

天野は野内にマチュピチュへの憧れを語った。マチュピチュでの二人の不思議な出会いであった。そして、野内与吉は天野芳太郎のマチュピチュ踏査に同行することになった。

2-4 マチュピチュ村の村長に

村人の為に働き村人に信頼されていた与吉は、1939年からマチュピチュ村が正式に村となるまで、マチュピチュ集落の最高責任者であるアヘンテ(行政官)を

務めた。こうして、与吉は、名実ともにマチュピチュ村の創設者となった。

1941年に太平洋戦争が始まると、連合国側についていたペルー政府は、日本語新聞の発行禁止、日系人資産の凍結措置などと共に、おもだった日本人を逮捕した。多くの日本人移民が、アメリカ国内の強制収容所に強制連行された。パナマに居た天野芳太郎もこのときアメリカに連行され強制収容所に入れられ、半年後に、捕虜交換船に日本に送還された。

与吉の元にも憲兵が派遣されたが、村人は、自分にも危険が及ぶ可能性があるにもかかわらず、「日本人はいない」と与吉の身を守った。

その後、与吉はマリア・ポルティージョと別れ、4人の子供を引き取り、後に生涯を共にするマリア・モラレス(筆者野内セサル良郎の祖母)と結婚した。1945年にマチュピチュ村で息子が生まれ。その後も5人の子供に恵まれた。

1947年マチュピチュ村の川が氾濫し、村は大きな土砂災害に見舞われた。そこで与吉は村人達と共に、地方政府あてに緊急支援を依頼した。そして地方政府からの命令で、復興のために、1948年、与吉はマチュピチュ村のアルカルデ(村長)に任命された。当時の土砂災害を伝える新聞記事には与吉の名が記載されている。村人の結婚証明書にも、村長としての与吉のサインが残っている(写真6)。

与吉は、1952年、ペルー国鉄クスコーサンタ・アナ鉄道で再度働き、定年まで勤めた後、この仕事を息子の一人であるノウチ・セサル・モラレス(筆者の父)に引き継いだ。

天野芳太郎のマチュピチュ訪問の5年後、日米開戦が間近の1940年にもう一人の日本人がマチュピチュを訪れている。「インカ帝国と日本人」を書いた福中今次である。彼は、マチュピチュでの野内与吉での出会いを次のように書き残している(福中1940:145-146)。

117キロの旅行は、軽便鉄道が利用できる。約2時間半もするとマチュピチュの駅に着く、そこに小部落がある。恐らく2、30家族もあるうか、もちろん土民ばかりであるが、この村の村長がたった一人ここにいる日本人である事が不思議である。福島県人の野内という人で、インカの後裔という女性を妻にして村長兼ホテル経営者で無論部落唯一のホテルである。室は5指で数え得る程しかない。けれどもかかるアンデス僻遠の地に日本人経営のホテルがあるという事は非常な歓喜を覚える。早速その所に投じて主人と共に故国の事どもを語り合した。

今中は、野内与吉について「村長兼ホテル経営者」と記している。このときの与吉の役職は、アヘンテ(行政官)であったが、ペルーの地方行政では、上位行政府から任命されるゴベルナドール(行政官:行政官に属す末端の村落ではアヘンテ)と村人が選ぶアル

カルデ（村長）のリーダーの二重制度となっている。当時の野内与吉が、実質的な村の長であったことは間違いないと思われる。

2-5 三笠宮殿下との出会いと故郷への帰還

野内与吉の福島県の家族は、音信不通で消息がわからない与吉のことを心配していた。ところが、1958年、与吉にとって思いがけない出来事が起こった。三笠宮殿下がブラジル移住50周年記念式典参加のためブラジルをご訪問した折、ペルーを訪れ、マチュピチュ遺跡を訪問されたのである。その際に、与吉の長女オルガ・ノウチが三笠宮殿下に花束を贈呈した。その出来事が日本の新聞記事となった。

「インカの三笠宮さま遺跡発掘にお立会い 野の花もって日本女性の歓迎」の見出しで始まる記事には「日本人野内与吉さん福島県出身」と記載されており、これを日本にいる家族が目にし、与吉の消息を知った。そして日本大使館を通じて与吉と連絡をとり、家族が旅費を集め、1968年、故郷の福島県大玉村に半世紀ぶりに帰郷することができたのである。

与吉の両親は既に他界していたが、兄弟や親戚らが歓迎した。与吉は日本に着くと「電気はついたか？」と質問したそうで、過ぎた年月の長さが伝わってくる。滞在中は、マチュピチュ遺跡に関する講演会を開くなど、村人にペルーの魅力を伝えていた。また、地元の新新聞やラジオ番組に出演し、半世紀ぶりの帰郷に「今世浦島（現代の浦島太郎）」と紹介され、その音声も残っている。

与吉の兄弟など故郷の家族は、与吉に日本に残るように説得したが、「ペルーには妻や11人の子供たちが待っている」と、日本の家族に別れを告げた。そして、クスコに戻ってわずか2ヶ月後の1969年8月29日、与吉は、ペルーの家族に見守られて、息を引き取った。

3 ペルー移住とアシエンダ

3-1 日本人ペルー移住の開始

現在のペルーを中心とするアンデス地方で栄えたインカ帝国は、スペインによって征服され、植民地となった。そこでは、当初、エンコミエンダ制という、スペイン人征服者らへの現地住民の割り当て制度（キリスト教の普及という名目で、配分された現地住民を賦役させることによって利益を得る制度）がとられた。それが、先住民人口の減少などによってそれが機能しなくなると、16世紀末ごろから大土地所有制に基づく、アシエンダ（Hacienda）と呼ばれる大農場が発達した。植民地官吏、富裕商人、カトリック修道会などがインディオ（先住民）の土地を次々と収奪して土地を手に入れ、大規模な農業経営を行った。

インディオたちの人口が、スペイン人による虐待や、ヨーロッパから持ち込まれた天然痘、インフルエンザなどの疫病によって減少し、アシエンダでも労働

力の不足したため、それはアフリカ系の奴隷によって補われた。ペルーでサトウキビの栽培が盛んになり、さらに労働力が不足するようになると、1849年以後は、ポルトガル領マカオからクーリー（苦力）と呼ばれる中国人労働者が送り込まれるようになった。その多くは、甘言と金に釣られて契約した農民や漁民、路上生活者などで、半ば奴隷同然に船に積み込まれた。南北戦争後のアメリカ合衆国での奴隷解放の影響で、ペルーでも1854年に奴隷解放令が出されると、クーリーの需要はさらに高まった（田中重太郎1926）。

ペルーとの国交開始は、明治5年に起こった「マリア・ルス号事件」がきっかけになった。太平洋を航行中のペルー船マリア・ルス号（350トン）が暴風雨に遭遇し、横浜港に臨時に寄港したとき、クーリーが脱走し、保護を求めた事件である。この事件は裁判に発展し、結局日本政府は、乗船していた230人のクーリー全員を解放した（伊藤力1974：1-4）。この事件は、日本とペルー政府の間に紛争を引き起こしたが、1873年にロシア皇帝の仲裁で解決し、両国の間に日秘修交仮条約が締結され、ペルーは南米で最初に国交が結ばれた国となった。

20数年間で8万人以上のクーリーがペルーに送り込まれ、清国政府からの抗議があり、1874年に禁止された。そして、その後に日本人の移民が続いた。日本人のペルー移住は、田中貞吉によって道が開かれた（入江寅次1942：339-345）。彼は、海軍留学生として、サンフランシスコで8年間学んだが、その時、後にペルー大統領となるレギアがいた（富田謙一、影山知二1924）。田中は日清戦争に従軍し、退役後の明治31（1898）年、移民取扱人森岡真の代理人として、海外移民事務視察のため南米に渡った。田中は、ペルーで英国農事会社支配人の地位にあったレギアと会い、移民受け入れの提案を受けた。当時は、ハワイや北米で起こり始めていた排日運動によって、移民事業は大きな壁につきあたっていたため、日本政府も大いに関心をもった。結局、ペルー政府が日本人移民を許可し、田中は耕地主代表との間に移民の契約を結んだ。移民の年齢は20歳から45歳、契約期間は4年（のちに1年に変更）、日給は1ソル20セントポ（邦貨1円余に相当）、住居・医療施設、労働に必要な器具などは雇い主がととのえる、雇い主は、移民取扱業者に、船賃を含め移民1人につき10ポンドを支払うこと、などの取り決めがなされた。

受け入れ体制が整うと、移民取扱業者「森岡商会」が移住希望者の募集を行った。そして、明治32年2月28日、790名の移民を乗せた「佐倉丸」が横浜港を出航し、4月3日ペルー海岸に到着した。

3-2 ペルーでの移民の実情

ペルー移民第一航海者たちの前途は、惨憺たるものだった（入江寅次1942、伊藤力1974）。住居や衛生状態も悪く、マラリア、腸チフス、赤痢などの病気で倒れる者が続出した。しかも、サトウキビの労働は厳し

く、給料はノルマ制に変えられ、約束の給料を稼ぐことは不可能だった。後悔しても日本に帰るてだてはなく、最初の一年間で100人以上が犠牲になった。

日本人移民にとって、移民取扱業者の宣伝文句とかげ離れたペルーの状況やアシエンダの過酷な搾取の構造は、彼等の夢を打ち砕くものであった。厳しい労働と死の恐怖にかられて逃げ出すものが続出した。また各アシエンダにおいて、意志の疎通を欠いた移民と雇用者側の間に紛争が起り、大勢の移民が首都リマに引き上げてきた。

窮状を訴える嘆願書が相次いで出されたため、外務省は翌年（1900年）メキシコから外務書記生野田良治をペルーに派遣した。各アシエンダの実状を視察した野田は、ストライキの蔓延、耕地主と移民の確執、低収入、死亡者の続出を目のあたりにし、本省への最初の報告では、移民全員を帰国させた方がいいと報告した。しかし、次の報告では、状況は改善しておりしばらく事態を見たい、と変わった。その後、森岡商会は「契約満期の移民のため汽船を送るのに多額の金がかかる。往路、空船では損失が大きいため第二回の移民を送りたい」として、外務省の許可を得た。こうして、多くの問題をかかえながらもペルー移住は継続されることになった。

しかし、契約満了者で蓄財を成し帰国できるものは僅かだった。かといって、アシエンダと再契約するものも少なかった。彼等の多くは首都に移動し、家内労働者やボーイとなり、あるものは露天商や理髪業などの小事業に着手し、やがて事業を拡大していった。特に発展したのは理髪業で、明治40年（1907年）には、リマの日本人理髪店が25軒に達し（リマ全体の理髪店の総数は65軒）、移民の最初の職業団体である「リマ日本人理髪組合」が設立された。

移民が始まってから10年目にあたる明治42年（1909年）までに計10回の移民船がペルーまで往復し、計6,295人を輸送した。その間に死亡した人は481人を数えた。帰国者はわずかに414名、外国へ転航した人が242名、残留者は計5,158名であった⁴⁾。

多くの日本人移民がペルーに根をおろすようになると、移民の生活基盤はある程度安定し、日本人移民社会の発展が始まった。大正元年にはインテリの集まりである「日本人協会」が設立され「アンデス時報」が発刊された⁵⁾。大正6年（1917年）には中枢団体としての「秘露中央日本人会」が組織された。野内与吉が渡航したのは、この年である。

契約移民は大正12年（1923年）、ペルー国との同意の上で廃止となった。その理由は、アシエンダの多くがサトウキビ栽培から綿花栽培に切り換えたため、移民の需要に変化が生じたことに加え、新来の移民は耕地で縛られるのを嫌い、移民会社に損害賠償を支払う

のを覚悟して、耕地を出る者が多くなったことなどである。結局、25年間に移民会社によって輸送された移民は、計17,764名に上ったが、以後は呼び寄せ移民に限られることになった。

3-3 日米開戦と日本人移民

リマでは、急成長する日系移民に対する反発が鬱積し、不穏な動きが急速に広まっていた。1930年、世界的経済危機の影響で苦境にあったレギア政権（1908-1912、1919-1930）に対するサンチェス・セロ少佐のクーデターが起こった。その混乱に乗じた暴徒が20余軒の日本人店舗を襲った⁶⁾。さらに、1932年ごろから「日本人がペルー人の労働、商業活動を奪い、生活に脅威を与える」といった排日的論調が先鋭化し、対日貿易の輸入超過が槍玉にあげられ、1935年には日秘修交通商条約が廃棄された。排日運動は日に日に高まり、1940年5月、日本人の店舗に対する略奪に発展し、リマ市の日本人店舗はほぼ壊滅状態となった。

1940年、略奪の痛手が癒えぬなか、ペルー日本人社会でも皇紀2600年奉祝の祭典が執り行われた。そのころの日本は三国同盟が結ばれ、「東亜の盟主日本」などの文字が新聞紙上に埋めていた。日本人移民にとっては、本国が大飛躍を遂げていると信じるのが慰めであった。しかし、1941年12月7日（日本時間で8日）ついに日本が英米軍との戦争に突入すると、翌8日には、直ちに日本人に対する資金凍結令が発布された。翌年1月24日、ペルーは日本に対する国交断絶を宣言する。

ペルーに居た主だった日本人は官憲に拘束され、北米の収容所に送られた。村のリーダーとなっていた野内与吉にも官憲の手が伸びたが、このとき、彼は村人に守られ拘束を免れた。その事実、村人がいかに野内を信頼していたかを表している。

4 福島（二本松市）での展示会開催

4-1 展示会の開催まで

すでに述べたように、筆者（稲村）は、放送大学の特別講義を企画・制作し、展示会を企画した。特別講義のゲストでもある大貫良夫氏（東京大学名誉教授）と鶴見英成氏（東京大学総合研究博物館助教）の尽力により、まず東京大学総合研究博物館の分館インターメディアテク（JPタワー、KITTE内）での「黄金郷を彷徨うーアンデス考古学の半世紀」展の開催が実現した。続いて、6月28日（日）から7月20日まで、天野芳太郎の生地である秋田で「アンデスに魅せられた男天野芳太郎」展を開催した。

それらの展示会での経験を踏まえて、放送大学、日本マチュピチュ協会、福島民報社の主催で、二本松市

⁴⁾ 以上、移民開始からの10年間については〈入江寅次1942：98-103〉

⁵⁾ 以下、ペルー日本人社会の実情等については〈伊藤力1974：54-67〉

⁶⁾ 以下、日本人社会の実情等については〈伊藤力1974：96-145〉

市民交流センター（福島県二本松市）で「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」展を開催することになった。

この展示会は、野内与吉の渡航から100年になることを記念し、また、マチュピチュ村と大玉村の友好協定が締結されたことも記念して実施することになった。友好協定の締結は、現在のマチュピチュ村の住民が、野内与吉の功績を認めて、他の自治体の希望を退けて、大玉村を選んで締結したものである。友好協定締結に先立って、2012年、野内セサル良郎が、福島県大玉村内外の住民（21名）と共にペルーを訪問し、大玉村村長から預かった親書をマチュピチュ村村長に渡し、姉妹都市に向けての交流を依頼した（写真7）。友好協定は、そうした事前の活動が実ったものである。そして、この協定締結の一環として、マチュピチュ村のガヨソ村村長とその一行の計9名が大玉村を訪問すると共に、「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」展のオープニング・セレモニーに参加した（写真8）。この式典には、マチュピチュ村ご一行に加え、ペルー大使館のマリオ・プスタマンテ参事官、大玉村の押山利一村長、放送大学の宮本みち子副学長、福島民報社の高橋雅行社長、ほかが参加した（写真9）。

4-2 展示の内容

展示の最初に、野内与吉の遺品として、手作りの工具類を展示するコーナーを設けた（写真10）。続いて、東京大学による発掘にかかわる展示として、コトシュ遺跡の「交差した手の神殿」の「交差した手」のレリーフ、アメリカ大陸最古の黄金装飾品のレプリカ（写真11）など、そして、BIZEN中南米美術館所蔵の約30点の土器（写真12）、織物、そしてミイラ頭骨を展示した。さらに、野外民族博物館リトルワールド所蔵の現代の伝統的な民具（農具、土器、織機、楽器など）も展示した。

アトラクションとして、マチュピチュ巨大写真を展示し、その前で、民族衣装で記念写真が撮れるようにした。これは、期待通り、来場者の方々に大いに楽しんでいただいた（写真13~15）。このコーナーには放送大学の学生ボランティアの皆さんが、民族衣装の試着の手伝いなどで活躍した。

展示会場では、筆者（野内セサル良郎）の父セサル・ノウチ・モラレス（野内与吉の息子）がアコーディオンの演奏を行い、大いに観客を沸かせた（写真16）。

また、BIZEN中南米美術館と日本マチュピチュ協会によって民芸品などのショップも出すことにした。展示会の企画の概要は以下の通りである。

【展示内容】

- ・マチュピチュ巨大写真（3m×10m）
- ・野内与吉（マチュピチュ村村長）遺品（約50点）：マチュピチュ鉄道関連の工具等

- ・古代アンデス古代文明出土品（約70点）：土器、織物、古代裂、ミイラ頭骨、黄金装身具レプリカ、交差した手レプリカ
- ・アンデスの現代の文化を表す民具等（約50点）
- ・大玉村・マチュピチュ村友好活動の紹介
- ・その他

【イベント等】

- ・全展示写真撮影可
- ・民族衣装の貸し出しと試着（無料）：マチュピチュの前での記念写真可
- ・講演：「野内与吉とその生涯」野内セサル良郎、「古代アンデス文明と先住民文化」稲村哲也、マチュピチュ村・大玉村友好都市締結記念「マチュピチュ村訪問団長、渡辺左内
- ・民族音楽等：期間中の特定日にフォルクローレ演奏（アミーゴス・デ・川俣、ラ・パス）

【実行委員会】

- 大貫良夫（東大アンデス調査団元団長、東京大学名誉教授）：顧問
- 野内セサル良郎（日本マチュピチュ協会会長）：共同代表
- 稲村哲也（放送大学教授）：共同代表
- 森下矢須之（BIZEN中南米美術館館長）
- 関根清崇（株式会社パイク代表取締役）
- 佐藤義光（桜の聖母学院高校講師、アンデス研究家）
- 野内文孝（大玉村国内外交流協会会長）

4-3 放送大学学生ボランティア 感想文「感謝の気持ちに満たされて」（根本芳則）

福島県での展示会では、大玉村のボランティア、桜の聖母学院高校のボランティア、放送大学のボランティアのみなさんに多大な協力を得た。以下では、ボランティアの代表として、呼掛け人である根本芳則の感想文を掲載する。

平成28年8月7日から28日までの月曜日を除く19日間、福島県二本松市市民交流センター多目的室で開催された「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」展のボランティア参加のお話は、まず福島学習センターの森田道雄センター長からあり、その後、展示会の実行委員代表である放送大学教授稲村哲也先生より具体的な参加取組みについてのお話を伺い、福島学習センター所属の在学生への参加募集の呼掛けを行う事となりました。

野内与吉は、120年ほど前に福島県の（旧）玉井村に生まれた方であり、私もその玉井村に生まれました。玉井村は、昭和30年に大山村と合併し大玉村となり、昭和43年7月に野内与吉は一旦帰郷しました。その当時、私は17歳の高校生で、野内与吉帰郷のラジオ放送番組（インタビューの音声が残されている）を聴いた記憶は残っていませんが、現在私は放送大学生であり、また現大玉村に在住する者として、今回の展示会のボランティア募集の呼掛け人となりました。

当初ボランティア募集呼掛けの文書を福島学習センター学生控室掲示板に掲示させて頂き、その上での口頭呼掛けを考えておりましたが、学習センター笹田事務長より7月発行の機関誌「もみじ」発送時に「ボランティア呼掛け文書」を同封して頂けることのお話があり、募集締切の7月9日までの約10日間に12名の応募があり延べ全54人日のボランティア作業参加を得る事が出来ました。

ボランティア作業の内容は「放送大学PRコーナーでの資料配布・説明」、来場者に好評だった「アンデス民族衣装を試着してのマチュピチュ遺跡大パノラマ写真前での写真撮影」、「ショップ・コーナーのサポート」、「ペルー民族音楽演奏時の椅子の配置・戻し」等でしたが、ボランティアに参加された皆様の来場者対応のテクニックの素晴らしさには只々驚くばかりでした。

展示会の運営については、開催当初はなかった「世界ふしぎ発見番組VTR」のスクリーン投影や、野内与吉の息子さんのセサル・ノウチ・モラレス氏によるペルー民族音楽演奏が加わり、来場者用椅子の設置等の作業に追われましたが、ボランティアの作業は日を追う毎にバージョンアップされていったと思います。2階会議室で開催された野内与吉の孫である野内セサル良郎氏の講演会では、椅子が足りないほどの参加者があり驚きました。

今回のボランティア活動を通じて多くの皆様と知り合う事ができ、また、ご協力を得たことに感謝の気持ちでいっぱいであり、野内与吉の功績を知る事など、この展示会がなければ得る事が出来ない、多くの経験をさせて頂きました。

有難うございました。

謝辞

福島（二本松市）での展示会の開催にあたっては、放送大学の学長裁量経費、福島民報の協賛、大玉村の協賛、(株)ウニードスの協力をいただいた。

展示品については、森下矢須之館長のご好意によりBIZEN中南米美術館の収蔵品をお借りした。また、大貫良夫・東京大学名誉教授、鶴見英成・東京大学総合研究所博物館助教のご尽力により、クントウル・ワシ遺跡出土の黄金製品（レプリカ）等をお借りした。野外民族博物館リトルワールドからアンデスの民具等

の収蔵品をお借りした。日本マチュピチュ協会から野内与吉の遺品等をお借りした。福島県立博物館から展示ケースをお借りした。また、著作権をもつ野外民族博物館リトルワールドとニューリー株式会社のご好意により、東京大学総合研究博物館所蔵のマチュピチュ遺跡「巨大写真」をお借りした。

展示会の運営にあたっては、実行委員メンバーのほか、片桐舞子氏（日本マチュピチュ協会監事）、セサル・ノウチ・モラレス氏（野内与吉の息子、筆者野内セサル良郎の父）、デルマン・ダビ・ガヨソ・ガルシア氏（マチュピチュ村長）、押山利一氏（大玉村村長）、大玉村国内外交流協会のボランティアのみなさん、桜の聖母学院高校のボランティアのみなさん、放送大学福島学習センターの森田道雄所長・スタッフの方々、根本芳則氏（呼掛け人）をはじめとする学生ボランティアのみなさんに多大なる協力を得た。

お名前を挙げる事ができないが、多くの協力者によって、展示会の開催が実現した。衷心より謝意を表したい。

参考文献

- 天野芳太郎 1983『わが囚われの記—第二次世界大戦と中南米移民』中公文庫
 天野芳太郎生誕100周年記念誌編集委員会 1998『天野芳太郎生誕100周年記念誌 南風光砂』天野博物館友の会
 伊藤力他 1974『在ペルー邦人75年の歩み』ペルー新報社、リマ
 稲村哲也・大貫良史・森下矢須之・野内セサル良郎・阪根博・尾塩尚 2016『古代アンデス文明と日本人—放送大学特別講義と展示会』『放送大学研究年報』33：79-95
 入江寅次 1942『邦人海外発展史』井田書店
 尾塩尚 1984『天界航路—天野芳太郎とその時代』筑摩書房
 桜井進 1940『移民の楽土』日本社、リマ
 田中重太郎 1925『秘露渡航道しるべ』日秘新報社、リマ
 鶴見俊介・加藤典洋・黒川創 2006『日米交換船』新潮社
 富田謙一、影山知二 1924『南米ペルー：大統領レギア・秘露と日本』日秘協会
 福中又次 1940『インカ帝国と日本人』国際文化研究協会
 森下精一伝編纂委員会 1980『森下精一伝』中央公論事業出版

(2016年11月14日受理)



写真1 「マチュピチュ村創設者・野内与吉と古代アンデス文明」展チラシ



写真2 コトシュ遺跡を発掘中の泉靖一（1963年）
（写真提供：大貫良夫）



写真3 東京大学アンデス調査団（大貫良夫団長：当時）が発掘中のクントウル・ワシ遺跡（写真提供：東京大学・埼玉大学クントウル・ワシ調査団）



写真4 マチュピチュへの鉄道と駅（1930年頃）



写真5 マチュピチュ村の創設に励んでいた野内与吉



写真6 野内与吉が村長としてサインした結婚証明書（1948年発行）：筆者（野内セサル良郎）がマチュピチュ村の役所の文書から発見した。



写真7 友好提携のため訪問したマチュピチュ（左は大玉村押山利一村長、右はマチュピチュ村ガヨソ村長、中央は野内セサル良郎）



写真8 マチュピチュ村長夫妻、右は在日ペルー大使館ブスタマンテ参事官



写真9 マチュピチュ村長を迎えて、オープニング・セレモニーのテープカット



写真10 展示した野内与吉の遺品：手作り工具など



写真11 「東大調査団による発掘」コーナーの黄金装飾品（レプリカ）展示、右手奥に「古代アンデスの織物」コーナー



写真14～16 マチュピチュの前で民族衣装を着て記念撮影



写真12 「古代アンデスの土器」コーナー、右手奥にマチュピチュのパノラマ大写真



写真17 ペルーからセサル・ノウチ・モラレス氏（野内与吉の息子、セサル良郎の父）も来日、親子で演奏をした。